2023年1月22日　中野教会―聖書の学び

　　　　　　　　　　　　　　　**「権威と権力」**

聖書箇所：マルコ1:21-28

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は、権威と権力というテーマでお話いたします。このテーマを、現在においても重大なテーマである「国家と宗教」の問題と関連させながら見ていきたい、と思います。聖書における言葉の使われ方からこの問題に入り込んでいきたいと思います。新改訳聖書第三版の中で、一つの節のなかに「権威と権力」の二つの言葉が同時に使われている説は3つあります。第一コリント15:24、エペソ書1:21、第一ペテロ3:22です。旧約聖書にはありません。エペソ1:21では「すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」とあります。「権威」「権力」に加え「支配」、「主権」の言葉もありますのでこの4つの言葉のを見てみます。まずギリシャ語です、この4つの言葉のギリシャ語は「arke:」「eksu:sia」「dunamis」kuriote:s」です。このうち、権威と権力に対応する「ekusu:sia」と「dunamis」に着目します。「権威」と「権力」を一応対立するものとして考えると、「支配」は「権力」の方に、「主権」は「権威」の方に親和性がある言葉のように思います。

　まずこの「eksu:sia」を見ます。このギリシャ語は新約聖書において102回出ていますが、半分以上が「authority、権威」の意味で使用されています。これ以外では「power、力」11回、「right、権利」が9回です。大部分が「権威」の意味と言ってよいと思います。実際の利用例をみると、福音書や黙示録では圧倒的に「神の力」の意味です。聖書箇所としてあげたマルコ1:22「人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである」はその代表例です。律法学者のように知識をひけらかすような教えではなく、神の力のこもった言葉で語った、ということの表現と思います。話し方という問題より、話し、教えの内容の問題でしょう。しかし、パウロの手紙などでこの「eksu:sia」が出てくるところを見ると、この地上での「力」や「権利」の意味でも使用されています。パウロはパリサイ派の教育を受けた人間なので旧約のギリシャ語訳での使い方の影響を受け、「eksu:sia」を「神の力」に使用するのみならずより広い範囲での使用をしているのだと推測します。いずれにしろ、新約における「eksu:sia」の使用は主に「神の力」を示している、とご理解ください。

　次は「権力」と訳されている「dunamis」の方です。この言葉は新約聖書で119回使用されており、「eksu:sia」の102回を超えています。その使われ方は「power、力」73回であり圧倒的ケースがこの意味です、あとは「miracles、奇跡」16回、「bodies、体」3回などです。この単語は「dunamai、できる」と言う意味の動詞の変化形です。英語の「can」です。“なにかをなさしめる力”ということです。新改訳第三版での翻訳をみると単に「力」と訳されているケースがほとんどですが「神の力」を意味する場合は単に「力」と訳し、王の力のような地上での力については「権力」と訳しているように見えます。問題は旧約のギリシャ語訳の方です。旧約のギリシャ語版である七十人訳では「dunamis」が120回ほど使用されていますが、ヘブル語では軍隊を意味する「tha:ba:」が64回で最も多く、あとは「gabu:ra:、権力、強さ」が17回、「hai:l、軍隊、軍人」が15回などです。従って軍事力に関する力が2/3を占めます。従って、「dunamis」の背後には軍事的力が念頭にあって使用されている、と言っても良いと思います。軍事的力は王乃至国家の権力ですから、「dunamis」を政治権力の表現とみなすことも許されると思います。新約における使用例としては、マリアの賛歌で有名なルカ1:52-53「権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、 富む者を何も持たせないで追い返されました」の「権力ある者」の部分が「dunamis」の関連語「dunate:s」です。新約のヘブル語訳では「gabu:ra:、権力、強さ」の変化形が使われています。新約の現代ヘブル語訳では「権力」の方ではなく「権威」の方のヘブル語「shari-i:m」が使用されています。

　「権威」や「権力」と訳される言葉から出発して、ギリシャ語、アラム語を含むヘブル語、英語訳、日本語訳をザーと見てみました。対応関係は大変入り繰ってはいますが、中心的部分に着目し、「権威」→「eksu:sia」→「shilt:n」→「authority」→「神の力」の流れと「権力」→「dunamis」→「gebu:ra,強さ」→「tsa:ba:,軍隊」→「power,army」→「政治権力」という流れです。「権威」と「権力」を対立的に理解し、「神の力」と「政治権力」の対比と言う形で理解したい、と思います。「権威」と「権力」を対比的に理解するのは国家という概念が確立した近代以降の考え方であるのですが、そのような理解の萌芽は昔から存在するのであって、旧約、新約の時代における「権威」と「権力」を「神の力」と「政治権力」の対比として理解しようということです。これは「宗教と政治」の力の緊張関係という理解でも良いと思います。新約の時代は正式には軍事力はローマ帝政に独占されていましたので「政治権力」はローマ帝政とみなす考えもありえますが、ユダヤは大祭司を中心とするサンヘドリンがローマ帝政の軍事力を背景とした貴族制の「政治権力」体制と理解してよいのではないか、と思います。

　イスラエルの歴史を「神の力」と「政治権力」の緊張関係の歴史とみることができます。モーセからサムエルの時代までは士師による政治権力優位の時代です。祭司集団はあったと思いますが実態的には士師の補助者であったのだと思います。王制がスタートしてソロモンまでは王が士師の役割を継承し、政治権力の担い手である王の支配下にありました。宗教儀礼の担い手の祭司集団が分裂し、宮殿祭司と預言者集団とに分かれたことがこの時代の特徴です。この2つの集団の存在は南北朝時代を通じてのことです。この預言者集団は在野勢力でありながら、王に諫言を述べ続けました。王の方もこの預言者を無視することはできず、時に耳を傾けました。預言者に民衆の敬意があったからです。この預言者集団の存在とその権威はイスラエルの歴史の特徴です。南北朝時代には地方の祭司集団と預言者集団が共同してクーデタを起こし、王の交替を実現したと考えられる場合もあります。また、この２つの集団の共闘により、王を頭とした宗教改革を実施させたこともあります。外国勢力とその影響を受けた者達の排斥が特徴です。しかし、これら集団が政治権力を掌握すると、政治権力に対する新たな批判勢力である預言者集団が再生産され、「王＋神殿祭司＋地主層」の政治権力集団に対する批判勢力となります。この「地方祭司＋預言者集団」が実質的に「神の力」を示す群れ、ということになります。体制内に、その体制に根本的異議を唱える批判集団が存在する、というイスラエル独自の社会構造が生まれます。一種の民主主義です。ハスモン王朝におけるパリサイ派とサドカイ派の対立がその表れです。エッセネ派クムラン教団のように再生産された預言者集団といえる群れもありました。主イエスの時代も「権威」と「権力」、即ち「神の力」と「政治権力」の対立軸はハスモン王朝、ダビデ王朝のそれを引き継いでいます。主イエスの福音宣教も、新しい預言者集団の形成プロセスである、という見方もできます。

ここで「権威」と「権力」に関して、その両者の関連について申し上げておきます。近代社会の特徴は主権国家という法的集団の確立にあります。当初は絶対主義王制の形で生まれましたがフランス革命以降の「国家の世俗化」のなかで、「権力」の代表的存在として、強制力である「警察」「軍隊」を中央集権的に掌握した「国家」が観念されるようになりました。つまるところ、国家権力とはそのような暴力的強制力を集中した組織体だ、とも言われるようになりました。しかし、そのような裸の強制力だけでは政治的支配は継続できません。権力は政治的支配の対象である民衆・国民がその政治権力を正当なもの、として受容する根拠となる「文化」を自らに、まとう必要があるのです。その受容があって初めて「権力」は「権威」となるのです。昔から、その「権威」の取得のための「文化」として利用されてきたのが「宗教」です。「宗教」は“信じる＝信頼する”ということがあって初めて成り立つものですから、この“信じる＝信頼する“対象に政治権力がなりえた時、その権力は安定的かつ強力なものになることができるのです。従って、政治権力は自らが宗教的権威を獲得するよう不断の努力をします。特定の宗教を自らの権威とすることが不可能な場合もあります。そうするとローマ帝国のような「皇帝礼拝」を強制するようなことになったり、イスラム共同体＝ウンマの守護者としてのスルタンという政治指導者が正当化される、ことになったりする訳です。宗教がその政治権力正当化の根拠にできなくなるとある特定のイデオロギーが宗教の代わりを果たす場合もあります。フランス革命における「理性」という神、アメリカの場合の「アメリカン・デモクラシー」、初期のソ連のような「世界共産主義」ということが「宗教」に代わるものの役割を果たすこともあります。近世以降、最も有効な「宗教代替物」として政治権力の唱道されるようになったのは「民族」です。ソ連の東欧支配は「汎スラブ運動」である、との見方ができますし、ナチスのゲルマン民族による第三帝国思想、中国における中華思想も「汎漢民族」思想と言えます。日本の場合、明治以降の天皇制絶対主義も宗教というより日本民族主義の一つの形態のように思います。いずれにしろ、「政治権力」が「権威」を得るべく各種政策を実行することは必然的なことであり、真の「神の力」の権威に忠誠心を持つ者は強い警戒心を失わず、時には警告の声を挙げなければならない、と思います。

イスラエルの歴史、思想の中で預言者集団の存在が極めて独自なもので歴史のダイナミズムを生み出してきたものであったことを申し上げました。イザヤの死後、イザヤの弟子たちがその思想を発展させで行ったと考えられます。それが第二、第三イザヤとなってイザヤ書40章以降が形成されていったものと思います。第二、第三イザヤはエレミヤ書以降の文書でありイザヤ書預言者集団はエレミヤの弟子集団の役割も果たしていたものと思われます。従って、第二イザヤの文書とされている「主の僕」の歌はエレミヤの思想をも受け継いでいるものだということです。これ以外の預言者集団として考えられるのはエゼキエルに続く預言者集団です。エゼキエルはエレミヤと同時代乃至その少々後まで予言した人物として知られていますが黙示文書預言者の先駆け、ということができます。その弟子たちはダニエル書、ゼカリヤ書の作者として黙示文書預言者として継承されていったと考えられます。エチオピア語で残っているエノク書の一部もこの預言者集団の手になるものと推測することができるのではないか、と思います。新約における「ヨハネ黙示録」もこの流れにあることは当然です。

もう一つ述べておきたいグループがあります。「知恵者」と呼ばれる人々です。「箴言」、「伝道者の書」、外典の「知恵の書」、シラ書、その他「知恵文学」と称せられる文書を書いた著者たちです。ダニエル書11:33-に「民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、長い間、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れる」とありますが「思慮深い人たち」と訳されている人たちも同種のひとたちだとおもわれます。現代でも欧米で「賢人者会議」と称する団体がありますが、この流れにあやかって作られたものと思われます。新約聖書での律法学者というのもこの流れの一種と考えられます。これらの人たちの言うことにはある種の権威があると信じられているため、政治権力もその支持を得ようと努力します。戦前の日本における「貴族院」も類似の発想と思います。現代でも議会の一部をこのように世間から「知恵者」と見られている人たちの集団としている国は多くあります。戦後日本も参議院はそのような意図をもって「全国一区」の選挙制度を採用したはずです。俳優やスポーツ選手などを議員として立候補させるような政党があり、「賢者」の集団としての権威を失いました。民主主義の劣化による政治にプレーキを掛けるという意味で再び注目されています。

「権威」と「権力」の話はきりがないくらいいろんな問題がありますがイスラエルの歴史は現代の我々にも参考になると思われます。もちろん、我々キリスト者は真の権威である「神の力」のみにより頼む、とはどういうことかを常に心していなければなりません。一言祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日は「権威と権力」というテーマで学びました。このテーマは「宗教と政治」のテーマと密接に関連しています。政治は裸の権力から権威ある存在となるため宗教を利用しようとします。宗教の方は布教を容易にするために政治の力を利用しようとします。双方に誘惑があります。私たちは主イエスの言動に示された信仰の軸をもって、政治権力に対し常に批判的姿勢を失わないことが求められています。今の世の中の動きを見ていると、このことが殊更重要に思われます。ここで主イエスはどうしろとおっしゃるだろうか、という思いに心を致し、それに、従う知恵と力とそして勇気をお与えください。主の御名により祈ります。アーメン）